

「レジデントのための感染症診療マニュアル」

青木 眞 著

東海大学医学部長

黒 川 清

青木眞先生による「レジデントのための感染症診療マニュアル」が医学書院から上梓された。

日本の臨床、特に内科を含めた臨床は、縦割りの伝統で形成されていたので、どうしても臓器別になりがちである。したがって、例えば感染症のような横断的なものについては、えてして診療科あるいは講座というような縦割りの構造は作りにくい歴史的な背景があった。ところが感染症は極めて日常的に重要な疾患であり、この道の専門家が臨床の教育や研修の場になかなかおられないのが実は問題であることは広く認識されている。このような背景から、日本では抗菌薬の過剰な投与、不適切な使い方、また抗菌薬の耐性菌の発生など、“日本の常識は世界の非常識”というのが数多くみられるのはよく知られている。

事実、感染症の研究もさることながら、臨床の practice、診療のパターンが中央検査部その他の発展とともに日本の健康保険制度では伝票をチェックするだけになってしまうので、日常的な診療の中でいろいろサンプルをとっても、培養その他で結果が出るのに 24～48 時間待たなければならないということがある。回診をしながらそのような不満を持つことは数多いと思うが、実際は聞いているほうも現実には“ベッドサイドでの感染症への正しいアプローチ”をよく知らない。ところが実践的な感染症診療というのはそんなものではない。感染症は極めて重要な内科の 1 部門である。例として内科のテキストブックの代表である

「Harrison」では 2,569 頁のうち、循環器 180 頁、消化器 174 頁、呼吸器 87 頁に対して感染症に 480 頁を費やしているし、「Cecil」では 2,298 頁のうち、循環器 220 頁、消化器 190 頁、呼吸器 100 頁、そして感染症 440 頁という配分になっている。それに比べて日本の教科書は、例えば医学書院の「新臨床内科学(第 7 版)」では 1,725 頁のうち 110 頁、朝倉書店の「内科学(第 7 版)」では 2,042 頁のうち 110 頁、金芳堂の「EBM 現代内科学」では 2,292 頁のうち 130 頁、というような具合である。これは、感染症があまり重視されていないということも 1 つの理由かもしれないが、感染症をそれだけ教育し、また臨床の現場で専門医として活躍している人が少ないことにもよるに違いない。

単著でこの本を書かれた青木先生は極めてユニークなキャリアをお持ちで、しかも感染症でオーソドックスなアプローチができる数少ない専門医であると言える。青木先生はアメリカで内科の 3 年間のレジデントを終えられ、一時帰国後、更に感染症のフェローシップをアメリカで行い、アメリカの内科専門医、感染症専門医の資格をもっておられる貴重な人材である。この先生がご自分の経験と実際の症例に基づいた経験だけでなく、感染症へのアプローチの ABC から、どのような動機でその感染症が疑われるのか、その場合には何をするのか、何をマーカーとしてその感染症に対応していくのか、どうしてそのような抗菌薬を使うのか、すべて実践的に一步一步の

仮説を積み上げながら検証していくという、まさに臨床の醍醐味のエッセンスがまとめられた素晴らしい本である。

青木先生が昨春国立国際医療センターを辞されたのを機に、東海大学では非常勤教授としてお迎えし、毎週 1 日、内科の回診や感染症のコンサルテーションを、また感染症セミナーも定期的にお願している。まさに教えるのも素晴らしい先生で、実践的で、ポイントを押さえていて、なぜそのようなアプローチをしなければいけないかを、頭に染み込んでもくるわかりやすさで教えて下さる。また、グラム染色の重要性和その有用性を教えて下さる。グラム染色は検査の発達とともにあまり病棟ではやらなくなってしまっていて、病棟を回っていない研修医や学生がいるというのは不思議な話だが、東海大学ではそれを皆に実践してもらうべく、青木先生とご相談しているところである。

このような本が皆さんの手元に置かれ、広く読まれることによって、感染症に対する理解が変わり、感染症へのアプローチがより正しく行われ、感染症への対策がより適切になり、抗菌薬の使用も適正になることが期待される。これが日常の臨床のエッセンシャルであるということをご皆さんに認識していただければと思う。

● A5 頁 576 図 20 カラー写真 17 表 141 2000 定価(本体 6,000 円 + 税) 送料実費

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)